

簡易懸濁法における製剤からの薬物溶出性に関する研究

著者	櫻田 渉
学位名	博士（薬学）
学位授与機関	北海道医療大学
学位授与年度	平成27年度
学位授与番号	30110甲第268号
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00010429/

平成 28 年 2 月 26 日

学位論文審査並びに最終試験結果報告書

大学院薬学研究科長 殿

主 査： 齊 藤 浩 司



副 査： 小 林 道 也



副 査： 吉 村 昭 毅



副 査： 村 井 毅



このたび 櫻田 渉 にかかわる学位論文審査並びに最終試験を行い下記の結果を得たので報告する。

記

1. 学位論文題目

簡易懸濁法における製剤からの薬物溶出性に関する研究

2. 論文要旨 (別添)

3. 学位論文審査の要旨

簡易懸濁法は、薬剤を経口的に投与するのが困難である患者での代替投与方法として多くの医療機関で実施されている。本投与方法は種々の錠剤やカプセル剤に適用可能とされるが、55℃で行う簡易懸濁操作が薬物の溶出に及ぼす影響についてはこれまでほとんど検討されていない。一方、市販されているすべての錠剤やカプセル剤について簡易懸濁操作時の溶出データを収集するには、かなりの時間と労力が必要となる。本研究では、オレンジブックやインタビューフォームに記載される溶出試験情報を用いて簡易懸濁操作時の薬物の溶出性を予測することを主たる目的として、物理化学的性質の異なるモデル薬物を種々選択し、簡易懸濁操作後の溶出挙動を比較検討した。そして、速やかに溶出する薬物及び溶出が非常に遅い薬物では簡易懸濁操作による溶出性の変化は小さいが、溶出が比較的緩徐である薬物の場合は簡易懸濁操作により顕著な溶出促進が認められ、患者に投与した場合、副作用モニタリングが必要になることを明らかにした。また、徐放性製剤の簡易懸濁法への適用についても、重要な知見を見出した。

本研究の成果は、簡易懸濁法による患者ケアを推進する上で、オレンジブックやインタビューフォームの情報を活用することにより、医療機関内で薬剤師が簡易懸濁法の是非を判断できることを示唆するものであり、臨床的重要性を含め学位論文に値する内容であると判断される。

4. 最終試験の要旨

研究発表会においては限られた時間の中で論旨の通った発表を行い、また口頭試問においても数々の質問に対して適切な回答が得られた。博士学位申請外国語試験（英語）にも合格し、関連する研究領域における知識・能力も十分であると判断される。

以上の結果 櫻田 渉 は博士(薬学)の学位を授与する資格の

ある

ものと判定する。

ない

以上